

お遊戯会のあり方

樋口三紀子

—— 幼児の実態からみて

考えられるもの ——



〔お遊戯会の反省〕

運動会も終り、秋の遠足も終ると、ほっとする間もなく保育室にも冬がくる。ストーブを出さねばならない。お弁当の御飯もあたためるようにしなければならぬ。庭の草花にも冬越の用意をしなければならぬ。寒さの訪れとともに、私達保育の事は一段と繁雑になってくる。

しかし、子ども達はますます元気で、日の光をいっぱい浴びて、すもう遊びやオニゴッコに息をはずませる。入園当時の姿から思えば、彼らの一挙一動にも、みちがえるほどの成長を感じるのである。子ども達の楽しそうに遊ぶ姿をみながら、「ゆきちゃんも、じゅんちゃんも大きくなったわね」と保育同志喜び合うことがしばしばある。

この頃になると、きまってる市の中心部にある公会堂で幼稚園のお遊戯会が盛大に催される。会場借用料一日？ 一万円とかで総経費になると私共保育所に勤務する者には想像もつかぬ額にちがいない。これらの莫大な費用は一体どこから出るのか、私の知る限りではないが、その豪華さが果して幼児教育の上に価値をもたらすであろうか。私はこれらの費用でどのようなお遊戯会が催されているか、二、三見学したことがある。内容を見ると、客席は真つ暗であり、広い舞台には唯一人、照明に照らされた女の子が、お振袖の裾を引きながら、手には扇と藤の一枝をもち、むずかしいポーズをとっていた。また、保育者にさえよく理解されているとは思えない「桜井の別れ」「川中

島」などが盛んに演じられていた。どうみても、幼児教育のみちすじからは縁遠いように思える。

このようなお遊戯会が、あちらこちらで催される頃になると、今度は各保育所でお遊戯会の準備に頭を痛めはじめる。各地で舞踊講習会が開かれ、保母は日曜は勿論、週日でも一日費して、振り付を習いにいく。そのため、保母は一日全く子どもから離れてしまうこともある。保母一人の欠勤で、保育児の生活がどんな状態になるか、改めて述べるまでもないだろう。それにもかかわらず講習会は毎回大盛況である。お遊戯会用として習って帰った振り付は、決められた出演者に殆んど個人指導の型で教えられる。時には講習会で習った幼児向きのものが、舞台来えしないという理由で小学生用のものがとりあげられることもある。保育所のお遊戯会は、このような状態のもとに催されるわけであるから、内容も先に述べた幼稚園のそれと殆んど変りはない。

いずれにせよ、このようなお遊戯会を催すためには、練習もなみたいていのものではない。事実、どここの園でもお遊戯会の一か月前になると殆んど練習を始めている。練習期間に入ると、子ども達は楽しい遊びの途中で何度も呼ばれ、練習のためにその遊びはいつも中断される。そればかりか数日前になると、夕方

遅くまで練習することさえある。ある幼稚園に通う子どもの両親から次のような話を聞いたことがある。「お遊戯の練習で遅く帰宅すると、夕食も待てず寝てしまう。いつもは、その日の出来事を話してくれるのに、この頃は黙っていたり、尋ねても仕方なく返事をする様子で疲れていることがよくわかる。」彼らの能力以上のことを憶え込ませるため、保母は不必要なほどの叱責と煽動で子どもにあたっているわけであるから、彼らが疲れるのも無理はないと思う。保育所においても、その頃の幼児の行動をよくみると、遊具をかたづけなくなったり、無気力な表情でぼんやりしている子どもがとかく多くなる。練習練習の毎日に、子ども達は心身ともに疲労していることがよくわかる。

現在、お遊戯会はこれほど園にとっても、子ども達にとっても負担の大きい行事でありながら、保育のカリキュラムに組んでいる園は殆んどない。すなわちお遊戯会は、子ども達の毎日の生活とは別の行事としてとりあつかわれているのである。この特別な行事の準備のために、一か月以上にもおよぶ練習は、彼らの毎日の保育所生活の上に二重にかぶさり、しかもそれがその生活とかけ離れた内容であることを考えたとき、子ども達にあたえる負担はあまりにも大きすぎると思われる。これは保

育上、きわめて重大な問題であり、充分反省しなければならぬ。

このように書き並べてみると、ずいぶんばかばかしい現状であることを誰れでも感じるであろう。あるいは、まだそんな状態の所もあったかと嘆く人があるかもしれない。しかし、これらは決して少数の例ではない。

〔望ましいお遊戯会のあり方〕

さて、幼児の実態から考えて望ましいお遊戯会とは、どのような意図のもとに行なわれるべきであろうか。

保育所における集団生活の中で、幼児はいろいろなことを経験し、成長する。音楽を聞き、歌い、楽器演奏の楽しさを知る。リズムに合わせて自由なびのびとした動きができるようになる。遊びを通して語彙も増し、話すことも上手になる。季節の移り変わりも、身辺にみられる生物の生活も、集団生活の中で発見し体験してきた。入園当初は、何をすることも不安な態度だった子ども達も、一年経てやがて春を迎えようとする頃には、自信のある態度に変ってくる。「今度は誰が歌いますか？」と保育母が尋ねると、一斉に「はいはい」と手をあげ、順番が待ちき

れないほどである。これらは、両親や保育母がどんなにか待ち望んだ彼らの成長した姿である。保育所に預けられる子ども達には、一日の殆んどを両親と別れて過ごすから、彼らが保育所でどんな生活をしているか、どのように成長しているか、両親にみていただく機会はきわめて少ない。それゆえにお遊戯会は、これまでの生活発表として、子ども達の成長した姿をありのまま示すことのできるよう、催されるべき性質のものだと思ふ。そして子どもと両親と保育母が一しよにその成長を喜び合い、楽しく過ごせる日でありたい。

保育にたずさわる人々に、お遊戯会はどうあるべきかを尋ねてみると、「一年の生活発表として行なわれるべきで、衣装など不必要」との意見が一致している。どの本にも、「子ども本位に計画し、内容が能力に合っていること」、あるいは、「保育の流れの中の生活発表会」としてあり、これまでの単なる見せもの的なお遊戯会を反省するとともに、望ましいあり方について、いきとどいた考察がなされている。しかし、問題はその実践にある。これらの考えを具体的におしすすめるには、それに附随する諸問題について、更に検討を加える必要があると思ふ。

「会のあり方をゆがめるもの」

望ましいお遊戯会のあり方として、一般にいわれているものは、前述のとおりである。保育者自身も、そのあり方を正しいものと認め、そうありたいと望んでいるにもかかわらず、現行のお遊戯会は、相変らず好ましくない性格をもちつづけている。そういった矛盾を毎年くりかえさねばならない原因はどこにあるのであろうか。

私の勤めている保育所のお遊戯会も、他の例にもれず、一か月以上の練習をし、豪華な衣裳をつけて「川中島」や「荒城の月」を演じていた。私はなんとかして会の内容を正しいものに向つていたいと考え、次のような試みをしてみた。私は子ども達が過ごしてきた一年間の保育生活の成果を、素直に劇の内容にとり入れ、それを保護者にみていただきたいと考え、子どもと相談の形をとりながら、「森の春」と題する劇をすることにした。その内容は、今までに習った歌やお話や遊びをとり入れたもので、保育所一年間の生活を森の四季として表現してみた。三十人の子も達は、それぞれ森の木や花や動物になるわけであるが、その配役には、子ども達の希望を十分にとり入れ

るようにした。子ども達の選んだ木や花や動物は、園庭で直接みることのできたものや、物語として聞いたことのあるもので、彼らがよく知っているものばかりだった。

この劇の練習に入ってみて、私は思わずホットした。子ども達の練習状態は実にのびのびとして明るく、私の望む方向にピッタリしたものであった。ある女の子の仲良し二人は、春風になって「どこかで春が……」とうたいながら、何だかゆらゆらと踊ってみせた。ある男の子は、冬の寒い風になって、花や動物が寒いさむいと逃げかくれるのをおもしろがって走りまわった。木枯しを表わした曲をレコードで流してやると、いつのまにかそのリズムにのって得意そうにしていた。動物達は土俵を書いてすもう遊びをし、見物の子も達は「おすもうくまさん」の歌をロクささんだ。練習も本番も八百長なしの勝負には、いつも自然の笑い声が上がっていた。こういった状態で練習が始まったわけで、私がほんの少し手を加えるだけで、劇はまとまったものになっていった。発表の日には寒いから皆セーターやズボンで行かない、使ったものといえば、雪になった子ども達が積った雪を表わすため白い布で木や花を覆った位で衣裳も小道具も殆んどいらなかった。平常の仲良しグループが劇中でも仲良しになったり、三十人の子も達がいくつつかの集団にわかれて

のびのびとした演技をやったのけた。

この試みによって、どのような批判が起るか楽しみだった。

私は子どもの実態を掴み得ていない点について、まどめの悪い点について批判と指導を仰ぎたかった。しかし実際に示された批判はそんなものではなかった。「お遊戯会を楽しみにして日舞を習わせたのに」「お正月とお遊戯会に着せようと新しく着物をこしらえたのに」「あれでは折角舞台に出ても栄えない」、そして三年以上も登園した子どもの母親は主役でない不満をありありと示された。子どもをお人形のようにお化粧し、たとえどんなに費用がかかろうと新しい着物を着せて晴れの舞台に出してやることに喜びを感じている人達があり、また他に負けてはならじと無理をしても、それにならう家庭も少なくない。これらの競争は一般に経済状態がよくなったのか、ますますはげしく習慣にさえなっているようだ。

このような土地柄で、突然私のような試みをしたことは無理であった。お遊戯会の悪評は、更に保育園・幼稚園の経営問題にも及ぶのである。好景気を伝えられる今の時代に、こんな小さいなことにもゆらく経営状態の貧しさと、地域の人々の無理解、母親の盲目愛などがゆがめられたお遊戯会から脱皮することを防いでいるようだ。考えようによっては、おとなを喜ばせ

ることによって多数の園児獲得をねらい、園の経営状態を豊かにすることは実に重要なことのように思う。しかし、それで幼児教育がゆがめられるという実態を保護者が知ったならば、どうであろうか。おそらく現行のお遊戯会のあり方に対し疑問の念をもつであろう。そこまで考えていくと、ゆがめられたお遊戯会を正しい姿にもっていくのは保育者の使命であるように思える。実際に幼児を研究し、幼児教育に全力をそそいでいる保育者こそ、家庭や地域社会に幼児教育のねらいがどんなものか認識してもらおうよう働きかけねばならない。そのためには、保育者が幼児教育についての正しい考えと、その表明力と、更に保護者に理解してもらおうまでの忍耐力をもたねばならない。行事開催の意図をはっきり示し、それを実践するならば、お遊戯会などは幼児教育について地域社会の関心を深めるためのよい機会である。現行のお遊戯会にみられる悪循環は、あくまで子どもの幸せを考え、まず保育者の努力でうち破らねばならないものではないだろうか。以上、お遊戯会についておおざっぱに述べてきたが、次にお遊戯会を要素別に、あるべき正しい姿について考えてみた。特に、幼児の実態から考えて反省し、あるいは検討しなければならぬものに重点をおいた。(つづく)

(やわらぎ学園)